

⑥ カチューシャ

※りんごの花ほころび
川面にかすみたち
君なき里にも
春はしのびよりぬ
君なき里にも
春はしのびよりぬ

岸边に立ちて歌う
カチューシャのやさし歌
春風やさしく吹き
夢が湧くみ空よ
春風やさしく吹き
夢が湧くみ空よ

カチューシャの歌声
はるかに丘を越え
今なお君をたずねて
やさしその歌声
今なお君をたずねて
やさしその歌声
※くり返し

⑫ コサックの子守歌

眠れや コサックのいとしの子よ
空に照る月を見て 眠れ

※やさしい ことばと歌をきき
静かにゆりかごに 眠れよや

※くり返し

⑨ トロイカ

雪の白樺並木 夕日が映える
走れトロイカほがらかに 鈴の音高く
走れトロイカほがらかに 鈴の音高く

響け若人の歌 高なれバイヤン
走れトロイカかるやかに 粉雪けって
走れトロイカかるやかに 粉雪けって

黒いひとみが待つよ あの森こそば
走れトロイカ今宵は 楽しいうたげ
走れトロイカ今宵は 楽しいうたげ

⑩ ウラルのぐみの木

川面静かに 歌流れ
夕辺の道を ひとり行けば
遠く走る 汽車の窓光る
若者の待つ ぐみはゆれる
オイ捲毛のぐみよ 白い花よ
オイぐみよ 何故にうなだれる

川面に夕霧 たちこめて
家路を急ぐ 工場の人
風にゆらぐ ぐみの葉かげ
若者二人 われを待つ
オイ捲毛のぐみよ 白い花よ
オイぐみよ 何故にうなだれる

⑬ 赤いサラファン

赤いサラファン 縫わないで
母さん私は いりません
いえいえお前 よくおきき
いく春秋が 過ぎ去れば
はかなくきえる 流れ星
お前も若さを いとしんで
くらせと祈るも 親なれば

※心に思うは 嫁ぎゆく
可愛いお前の 晴姿
赤いサラファン 縫う時は
たのしい昔が よみがえる

※くり返し

⑪ カリンカ

※カリンカ カリンカ カリン カマヤ!
サドウヤ ヴォダマリンカ マリン カマヤ!エイ!
※くり返し

朝早くとび起きて 顔をきれいに洗う
アイリウリ リウリ アイリウリ リウリ
顔をきれいに洗う
※くり返し

素足も軽くタブチカはいて 朝露ふんで牛を追う
アイリウリ リウリ アイリウリ リウリ
朝露ふんで牛を追う
※くり返し

朝露ふんで牛を追っていたら 森の中から熊が出た
アイリウリ リウリ アイリウリ リウリ
森の中から熊が出た
※くり返し

⑭ 泉のほとり

泉に水くみに来て 娘らが話していた
若者がここに来たら 冷たい水あげましょう
緑の牧場にひげづらの 兵士がやって来て
冷たい水がのみたいと 娘たちにたのんだ
※美しい娘さん ひげづらを見るな
兵士にゃひげも 悪いものじゃない
私は陽気な若者

ふた月もの戦いで ひげも髪もののびたのさ
このむさくるしいなりを 娘さん許してくれ
そこへ床屋の兵隊が来て
「ひげづらは集まれ!」 みるみる若者は
魔法の水で洗ったようになった
※くり返し

娘らのひとみは燃え ほがらかに歌がおこる
三人は愉快そうに 輪になって踊り出した
歌えバイヤン愛の調べを 若い血は燃える
胸の火は戦うときも 消えぬ人民のほのお

クローバー愛唱歌 白いバラ

若者が夜明けの森で	行くよやさしい若者は
バラの花みつけた	バラの花たおらずに
あさひに一人匂い咲く	思いのままに咲き匂い
白いバラの花	静かに散るように
若者のひとみ輝き	そよ吹く南の風が
そそぐよその花に	歌うよその花を

クローバー歌集 第1集 (2-5 ページ)

① ともしび	2	⑧ 夏の思い出	3	⑮ 遠くへ行きたい	4
② 山の口ザリア	↓	⑨ おもいでアルバム	↓	⑯ かあさんの歌	↓
③ この広い野原いっぱい	↓	⑩ 四季の歌	4	⑰ 琵琶湖就航の歌	5
④ 小さな日記	↓	⑪ 知床旅情	↓	⑱ 若者たち	↓
⑤ さとうきび畑	3	⑫ 惜別のうた	↓	⑲ たんぽぽ	↓
⑥ 北上夜曲	↓	⑬ 忘れな草をあなたに	↓	⑳ 雪山賛歌	↓
⑦ 北帰行	↓	⑭ 川は流れる	↓	㉑ はるかな友に	↓

クローバー歌集 第2集 (5-12 ページ)

CD-1 抒情歌編 (5-6ページ)

① 花の街	5
② あざみの歌	↓
⑦ 椰子の実	6
⑧ 芭蕉布	↓
⑨ 青葉城恋歌	↓
⑫ 菩提樹	↓
⑬ 故郷を離るる歌	↓

CD-3 ポピュラー (8-9ページ)

① すみれの花咲く頃	8
② 愛の讃歌	↓
③ サントワ・マミー	↓
④ さくら貝の歌	↓
⑤ 川は流れる	↓
⑦ 夜明けのうた	↓
⑧ 学生時代	9
⑩ 忘れな草をあなたに	↓
⑪ 下町の太陽	↓
⑭ 見上げてごらん夜の星を	↓

CD-5 ロシア民謡編 (11-12ページ)

② バイカル湖のほとり	11	⑪ カリンカ	12
③ ヴォルガの舟歌	↓	⑫ コサックの子守歌	↓
⑤ 一週間	↓	⑬ 赤いサラファン	↓
⑥ カチューシャ	12	⑭ 泉のほとり	↓
⑨ トロイカ	↓		
⑩ ウラルのぐみの木	↓		

CD-2 フォーク編 (6-7ページ)

① 遠くに行きたい	6
② この広い野原いっぱい	7
④ 白いブランコ	↓
⑤ 竹田の子守唄	↓
⑥ 若者たち	↓
⑦ 誰もいない海	↓
⑫ 死んだ男の残したものは	↓

CD-4 童謡・唱歌編 (9-11ページ)

① ちいさい秋見つけた	9
② この道	↓
③ 赤とんぼ	↓
④ みかんの花咲く丘	10
⑤ 叱られて	↓
⑥ 花	↓
⑦ 月の沙漠	↓
⑨ 雪の降る街を	↓
⑪ 早春賦	↓
⑫ 冬の夜	↓
⑬ 故郷の空	↓
⑭ 埴生の宿	11

クローバー愛唱歌 (12ページ CDなし)

白いバラ 12

クローバー歌集

第1集

① **ともしび**
楽団カチューシャ・訳詩／ロシア民謡／寺島尚彦・編曲
●ダーク・ダックス

夜霧のかなたへ 別れを告げ
雄々しきますらお 出でてゆく
窓辺にまたたく ともしびに
つきせぬ乙女の 愛のかげ

戦いに結ぶ 誓いの友
されど忘れえぬ 心のまち
思い出の姿 今も胸に
いとしの乙女よ 祖国の灯よ

やさしき乙女の 清き思い
海山はるかに へだつとも
ふたつの心に 赤くもゆる
こがねのともしび 永久に消えず

② **山のロザリア**
丘 灯至夫・訳詩／ロシア民謡／石川皓也・編曲
●ボニージャックス

山の娘ロザリア いつも一人歌うよ
青い牧場日暮れて 星の出るころ
帰れ帰れもう一度 忘れられぬあの日よ
涙ながし別れた 君の姿よ

黒い瞳ロザリア 今日も一人歌うよ
風に揺れる花のよう 笛を鳴らして
帰れ帰れもう一度 やさしかったあの人
胸に抱くは遺身の 銀のロケット

一人娘ロザリア 山の歌を歌うよ
歌は甘く哀しく 星もまたたく
帰れ帰れもう一度 命かけたあの夢
移り変わる世の中 花も散りゆく

③ **この広い野原いっぱい**
小園江圭子・作詩／森山良子・作曲／小谷 充・編曲
●小林啓子

この広い野原いっぱい 咲く花を
ひとつ残らず あなたにあげる
赤いリボンの 花束にして

この広い夜空いっぱい 咲く星を
一つ残らず あなたにあげる
虹にかがやく ガラスにつめて

この広い海いっぱい 咲く舟を
ひとつ残らず あなたにあげる
青い帆に イニシャルつけて

この広い世界中の 何もかも
ひとつ残らず あなたにあげる
だから私に 手紙を書いて

④ **小さな日記**
原田晴子・作詩／落合和穂・作曲／小川寛興・編曲
●倍賞千恵子

小さな日記につづられた
小さな過去のことでした
私と彼との過去でした
忘れたはずの恋でした

ちょっぴりすねて横むいて
だまったままでいつまでも
やがては笑って仲なおり
そんなかわいい恋でした

山に初雪ふる頃に
帰らぬ人となった彼
二度と笑わぬ彼の顔
二度と聞こえぬ彼の声

小さな日記につづられた
小さな過去のことでした

二度と帰らぬことでした
忘れたはずの恋でした

⑤ **さとうきび畑**
寺島尚彦・作詩、作曲、編曲
●上條恒彦

ザワワ ザワワ ザワワ
広いさとうきび畑は
ザワワ ザワワ ザワワ
風が通りぬけるだけ
昔海の向こうから
いくさがやって来た
夏の日ざしの中で

ザワワ ザワワ ザワワ
広いさとうきび畑は
ザワワ ザワワ ザワワ
風が通りぬけるだけ
あの日鉄の雨に
打たれて父は死んでいった
夏の日ざしの中で

ザワワ ザワワ ザワワ
広いさとうきび畑は
ザワワ ザワワ ザワワ
風が通りぬけるだけ
風の音にとぎれて
消える母の子守の唄
夏の日ざしの中で

ザワワ ザワワ ザワワ
広いさとうきび畑は
ザワワ ザワワ ザワワ
風が通りぬけるだけ
知らないはずの父の手に
だかれた夢を見る
夏の日ざしの中で

ザワワ ザワワ ザワワ
けれどさとうきび畑は
ザワワ ザワワ ザワワ
風は通りぬけるだけ
風よ悲しみの歌を
海に帰してほしい
夏の日ざしの中で

ザワワ ザワワ ザワワ
風に涙はかわいても
ザワワ ザワワ ザワワ
この悲しみは消えない

⑭ **埴生の宿**

埴生の宿も わが宿
たまのよそおい うらやまじ
のどかなりや 春の空
花はあるじ 鳥は友
おお わが宿よ
たのしとも たのもしや

ふみ読む窓も わが窓
るりのゆかも うらやまじ
清らなりや 秋の夜は
月はあるじ 虫は友
おお わが窓よ
たのしとも たのもしや

CD-5 ロシア民謡編

② **バイカル湖のほとり**

ゆたかなるザバイカルの
はてしなき野山を
やつれし旅人が
あてもなくさまよう
やつれし旅人
あてもなくさまよう

たたかいやぶれて
つながれしひと夜を
暗い夜のがれて
この道をあゆむ

バイカルのほとりに
たたずむ旅人
暗い世をのろいて
かなし歌うたう
暗い世をのろいて
かなし歌うたう

③ **ヴォルガの舟唄**

えーこら えーこら もひとつ えーこら
えーこら えーこら もひとつ えーこら
それ曳け船を それ巻け綱を
アイダダアイダ アイダダアイダ
樺の木に 巻いた
えーこら えーこら もひとつ えーこら
えーこら えーこら もひとつ えーこら

それ曳け船を それ巻け綱を
アイダダアイダ アイダダアイダ
樺の木に 巻いた
えーこら えーこら もひとつ えーこら
えーこら えーこら えーこら えーこら

⑤ **一週間**

日曜日に市場へ出かけ
糸と麻を買って来た
※テュリヤ テュリヤ テュリヤ
テュリヤ テュリヤ テュリヤリヤ
テュリヤ テュリヤ テュリヤ テュリヤリヤ

月曜日にお風呂をたいて
火曜日はお風呂に入り
※くり返し

水曜日にあのこと逢って
木曜日は送っていった
※くり返し

金曜日は糸巻きもせず
土曜日はおしゃべりばかり
※くり返し

恋人よこれが私の
一週間の仕事です
※くり返し

④ みかんの花咲く丘

みかんの花が 咲いている
思い出の道 丘の道
はるかに見える 青い海
お船がとおく かすんでる

黒い煙を はきながら
お船はどこへ 行くのでしょう
波に揺られて 島のかげ
汽笛がぼうと 鳴りました

いつか来た丘 母さんと
一緒に眺めた あの島よ
今日もひとりで 見ていると
やさしい母さん 思われる

⑤ 叱られて

叱られて
叱られて
あの子は町まで お使いに
この子はぼうやを なんねしな
タベさみしい 村はずれ
こんときつねが なきやせぬか

叱られて
叱られて
口には出さねど 目になみだ
ふたりのお里は あの山を
越えてあなたの 花の村
ほんに花見は いつのこと

⑥ 花

春のうらの隅田川
のぼりくだりの舟人が
かいのしずくも花と散る
ながめを何にたとうべき

見ずやあけぼの露あびて
われにものいう桜木を
見ずや夕暮れ手をのべて
われさし招く青柳を

にしき織りなす長堤に
暮るればのぼるおぼろ月
げに一刻も千金の
ながめを何にたとうべき

⑦ 月の沙漠

月の沙漠を はるばると
旅のらくだが 行きました
金と銀との くらおいて
二つならんで 行きました

金のくらには 銀のかめ
銀のくらには 金のかめ
二つのかめは それぞれに
ひもでむすんで ありました

先のくらには 王子さま
あとのくらには お姫さま
乗った二人は おそろいの
白い上衣を 着てました

広い沙漠を ひとすじに
二人はどこへ 行くのでしょう
おぼろにけぶる 月の夜を
対のらくだは とぼとぼと

砂丘を越えて 行きました
だまって越えて 行きました

⑨ 雪の降る街を

雪の降る街を 雪の降る街を
思い出だけが通りすぎて行く
雪の降る街を
遠いくにから 落ちてくる
この思い出を この思い出を
いつの日かつつまん
あたたかき幸せのほほえみ

雪の降る街を 雪の降る街を
足音だけが追いかけて行く
雪の降る街を
一人こころに 満ちてくる
この哀しみを この哀しみを
いつの日かほぐさん
緑なす春の日のそよ風

雪の降る街を 雪の降る街を
息吹きとともに こみあげてくる
雪の降る街を
誰もわからぬ わが心
このむなしさを このむなしさを
いつの日か祈らん
新じき光降る鐘の音

⑪ ① 早春賦

春は名のための風の寒さや
谷の鶯 歌は思えど
時にあらずと 声も立てず
時にあらずと 声も立てず

氷解け去り葦は角ぐむ
さては時ぞと 思うあやにく
今日もきのうも 雪の空
今日もきのうも 雪の空

春と聞かねば知らでありしを
聞けば急かる 胸の思いを
いかにせよとの この頃か
いかにせよとの この頃か

⑫ 冬の夜

燈火ちかく 衣縫う母は
春の遊びの 楽しさ語る
居並ぶ子どもは 指を折りつつ
日数かぞえて 喜び勇む
囲炉裏火は とろとろ
外は吹雪

囲炉裏のはたに 縄なう父は
過ぎしいくさの 手柄を語る
居並ぶ子どもは ねむさ忘れて
耳を傾け こぶしを握る
囲炉裏火は とろとろ
外は吹雪

⑬ 故郷の空

※夕空はれて 秋風吹き
月影おちて 鈴虫鳴く
思えば遠し 故郷の空
ああ わが父母 いかにおわす

澄みゆく水に 秋萩たれ
玉なす露は すすきに満つ
思えば似たり 故郷の野辺
ああ わが兄弟 たれと遊ぶ
※くり返し

⑥ 北上夜曲
菊地 規・作詩／安藤睦夫・作曲／前田憲男・編曲
●ダーク・ダックス

匂い優しい 白百合の
濡れているよな あの瞳
思い出すのは 思い出すのは
北上河原の 月の夜

宵の灯を 点すころ
心ほのかな 初恋を
思い出すのは 思い出すのは
北上河原の せせらぎよ

雪のちらちら 降る宵に
君は楽しい 天国へ
思い出すのは 思い出すのは
北上河原の 雪の夜

⑦ 北帰行
宇田 博・作詩、作曲／若松正司・編曲
●ボニージャックス

窓は 夜露に濡れて
都 すでに遠のく
北へ帰る 旅人ひとり
涙 流れてやまず

夢は むなくく消えて
今日も 闇をさすらう
遠き想い はかなき希望
恩愛 我を去りぬ

今は 黙して行かん
なにを 又語るべき
さらば祖国 愛しき人よ
明日は いずこの町か
明日は いずこの町か

⑧ 夏の思い出
江間章子・作詩／中田喜直・作曲／若松正司・編曲
●日本女声合唱団

夏がくれば 思い出す
はるかな尾瀬 遠い空
霧のなかに うかびくる
やさしい影 野の小径
水芭蕉の花が 咲いている
夢みて咲いている 水のほとり
石楠花色に たそがれる
はるかな尾瀬 遠い空

夏がくれば 思い出す
はるかな尾瀬 野の旅よ
花のなかに そよそよと
ゆれゆれる 浮き島よ
水芭蕉の花が 匂っている
夢みて匂っている 水のほとり
まなこつづれば なつかしい
はるかな尾瀬 遠い空

⑨ おもいでのアльバム
増子とし・作詩／本多鉄磨・作曲／高田 弘・編曲
●芹 洋子

いつのことだか 思い出してごらん
あんなこと こんなこと あったでしょう
うれしかったこと おもしろかったこと
いつになっても 忘れない

春のことです 思い出してごらん
あんなこと こんなこと あったでしょう
ぼかばかお庭で 仲良く遊んだ
きれいな花も 咲いていた

夏のことです 思い出してごらん
あんなこと こんなこと あったでしょう
むぎわらぼうしで みんなはだかんぼ
おふねも見たよ 砂山も

秋のことです 思い出してごらん
あんなこと こんなこと あったでしょう
どんぐり山の ハイキング ラララ
赤い葉っぱも とんでいた

冬のことです 思い出してごらん
あんなこと こんなこと あったでしょう
もみの木かざって メリークリスマス
サンタのおじいさん 笑ってた

冬のことです 思い出してごらん
あんなこと こんなこと あったでしょう
寒い雪の日 あったかいへやで
楽しい話 聞きました

一年じゅうを 思い出してごらん
あんなこと こんなこと あったでしょう
桃のお花も きれいに咲いて
もうすぐ みんなは 一年生
もうすぐ みんなは 一年生

⑩ 四季の歌
荒木とよひさ・作詩、作曲／青木 望・編曲
●芹 洋子

春を愛する人は 心清き人
すみれの花のような
ほくの友だち

夏を愛する人は 心強き人
岩をくだく波のような
ほくの父親

秋を愛する人は 心深き人
愛を語るハイネのような
ほくの恋人

冬を愛する人は 心広き人
根雪をとかす大地のような
ほくの母親
ランララララ……………

⑪ 知床旅情
森繁久彌・作詩、作曲／熊坂 明・編曲
●ダーク・ダックス

知床の岬に はまなすの咲くころ
思い出しておくれ 俺たちの事を
飲んで騒いで 丘にのぼれば
はるかクナシリに 白夜は明ける

旅の情か 酔うほどにさまよい
浜に出てみれば 月は照る波の上
君を今宵こそ 抱きしめんと
岩かげに寄れば ピリカが笑う

別れの日 came 知床の村にも
君は出てゆく 峠をこえて
忘れちゃいやだよ 気まぐれ鳥さん
私を泣かすな 白いかもめ
白いかもめ

⑫ 惜別のうた
島崎藤村・作詩／藤江英輔・作曲／若松正司・編曲
●ダーク・ダックス

遠き別れに たえかねて
この高殿に のぼるかな
悲しむなかれ わが友よ
旅の衣を ととのえよ

別れといえば 昔より
この人の世の 常なるを
流る水を 眺むれば
夢恥かしき 涙かな

君がさやけき 瞳のいろも
君くれないの 唇も
君が緑の 黒髪も
またいつか見ん この別れ

⑬ 忘れな草をあなたに
木下龍太郎・作詩／江口浩司・作曲／寺島尚彦・編曲
●ヴォーチェ・アンジェリカ

別れても 別れても 心の奥に
いつまでも いつまでも
憶えておいて ほしいから

幸せ祈る 言葉にかえて
忘れな草を あなたに あなたに

いつの世も いつの世も 別れる人
会う人の 会う人の
運命は常に あるものを
ただ泣きぬれて 浜辺につんだ
忘れな草を あなたに あなたに

喜びの 喜びの 涙にくれて
抱き合う 抱き合う
その日がいつか 来るように
二人の愛の 思い出そえて
忘れな草を あなたに あなたに

⑭ 川は流れる(モノラル)
横井 弘・作詩／桜田誠一・作曲、編曲
●仲宗根美樹

病葉を 今日も浮かべて
街の谷 川は流れる
ささやかな 望み破れて
哀しみに 染まる瞳に
黄昏の 水のまぶしさ

思い出の 橋のたもとに
錆ついた 夢のかずかず
ある人は 心つめたく
ある人は 好きで別れて
吹き抜ける 風に泣いてる

ともし灯も 薄い谷間を
ひとすじに 川は流れる
人の世の 塵にまみれて
なお生きる 水をみつめて
嘆くまい 明日は明るく

⑮ 遠くへ行きたい
永 六輔・作詩／中村八大・作曲／前田憲男・編曲
●上條恒彦

知らない街を 歩いてみたい
どこか遠くへ 行きたい
知らない海を ながめていたい
どこか遠くへ 行きたい

遠い街 遠い海
夢はるか ひとり旅
愛する人と めぐり逢いたい
どこか遠くへ 行きたい

愛し合い 信じ合い
いつの日か しあわせを
愛する人と めぐり逢いたい
どこか遠くへ 行きたい

⑯ かあさんの歌
窪田 聡・作詩、作曲
●合唱団 白樺

かあさんが 夜なべをして
手袋 あんでくれた
木枯し吹いちゃ 冷たかろうて
せっせと あんだだよ
ふるさとの 便りはとどく
いろりの においがした

かあさんは 麻糸つむぐ
一日つむぐ
おとうは 土間でわら打ち仕事
お前も がんばればよ
ふるさとの 冬はさみしい
せめて ラジオ聞かせたい

かあさんの あかぎれいたい
生みそを すりこむ
根雪もとけりゃ もうすぐ春だ
畑が 待ってるよ
小川の せせらぎが聞こえる
なつかしさが しみとおる

⑰ 琵琶湖周航の歌
小口太郎・作詩、作曲／小川寛興・編曲
●ボニージャックス

我は湖の子さすらいの
旅にしあれば しみじみと
昇る狭霧やさざなみの
滋賀の都よいざさらば

松は緑に砂白き 雄松が里の乙女子は
赤い椿の森蔭にはかない恋に泣くとかや

波の間に間に漂えば 赤い泊火懐しみ
行方定めぬ浪枕 きょうは今津か長浜か

⑱ 学生時代

つたのからまるチャペルで 祈りを捧げた日
夢多かりしあの頃の 思い出をたどれば
なつかしい友の顔が 一人一人浮かぶ
重いカバンをかかえて かよったあの道
秋の日の図書館の ノートとインクのにおい
枯葉の散る窓辺 学生時代

讃美歌を歌いながら 清い死を夢みた
何のよそおいもせずに 口数も少なく
胸の中に秘めていた 恋への憧れは
いつもはかなくやぶれて 一人書いた日記
本棚に目をやれば あの頃読んだ小説
過ぎし日よ私の 学生時代

ローソクの灯に輝く 十字架をみつめて
白い指を組みながら うつむいていた友
その美しい横顔 姉のように慕い
いつまでも変わらずにと 願った幸せ
テニス・コート キャンプ・ファイヤー
なつかしい 日々は帰らず
素晴らしいあの頃 学生時代
素晴らしいあの頃 学生時代

⑩ 忘れな草をあなたに

別れても 別れても 心の奥に
いつまでも いつまでも
おぼえておいて ほしいから
しあわせ祈る ことばにかえて
忘れな草を あなたに あなたに

いつの世も いつの世も 別れる人と
会う人の 会う人の
さだめは常に あるものを
ただ泣きぬれて 浜辺につんだ
忘れな草を あなたに あなたに

喜びの 喜びの 涙にくれて
抱き合う 抱き合う
その日がいつか くるように
ふたりの愛の 思い出そえて
忘れな草を あなたに あなたに

⑪ 下町の太陽

下町の空に かがやく太陽は
よるこびと 悲しみ写す ガラス窓
心のいたむ その朝は
足音しみる 橋の上
あゝ太陽に 呼びかける

下町の恋を 育てた太陽は
縁日に 二人で分けた 丸いあめ
口さえ聞けず 別れては
祭りの午後の なつかしく
あゝ太陽に 涙ぐむ

下町の屋根を 温める太陽は
貧しくも 笑顔を消さぬ 母の顔
悩みを夢を うちあけて
路地にも幸の くるように
あゝ太陽と 今日もまた

⑭ 見上げてごらん夜の星を

見上げてごらん夜の星を
小さな星の 小さな光が
ささやかな幸せをうたってる
見上げてごらん夜の星を
ボクラのように名もない星が
ささやかな幸せを祈ってる

手をつなごうボクと
おいかけよう夢を
二人なら
苦しくなんかないさ

見上げてごらん夜の星を
小さな星の 小さな光が
ささやかな幸せをうたってる
見上げてごらん夜の星を
ボクラのように名もない星が
ささやかな幸せを祈ってる

CD- 4 童謡・唱歌編

① ちいさい秋みつけた
誰かさんが 誰かさんが 誰かさんが みつけた
ちいさい秋 ちいさい秋 ちいさい秋 みつけた
めかくし鬼さん 手のなる方へ
すましたお耳に かすかにしみた
よんでる口笛 もずの声
ちいさい秋 ちいさい秋 ちいさい秋 みつけた

誰かさんが 誰かさんが 誰かさんが みつけた
ちいさい秋 ちいさい秋 ちいさい秋 みつけた
お部屋は北向き くもりのガラス
うつろな目の色 とかしたミルク
わずかなすきから 秋の風
ちいさい秋 ちいさい秋 ちいさい秋 みつけた

誰かさんが 誰かさんが 誰かさんが みつけた
ちいさい秋 ちいさい秋 ちいさい秋 みつけた
むかしの むかしの 風見の鳥の
ぼやけたとさかに はぜの葉ひとつ
はぜの葉あかくて 入日色
ちいさい秋 ちいさい秋 ちいさい秋 みつけた

② この道

この道はいつか来た道
ああ そうだよ
あかしやの花が咲いてる

あの丘はいつか見た丘
ああ そうだよ
ほら 白い時計台だよ

この道はいつか来た道
ああ そうだよ
お母さまと馬車で行ったよ

あの雲はいつか見た雲
ああ そうだよ
山査子の枝も垂れてる

③ 赤とんぼ

夕焼け小焼けの 赤とんぼ
負われて見たのは いつの日か

山の畑の 桑の実を
小籠につんだは まぼろしか

十五でねえやは 嫁に行き
お里のたよりも 絶えはてた

夕焼け小焼けの 赤とんぼ
とまっているよ 竿の先

CD- 3 ポピュラー編

① すみれの花咲く頃

春すみれ咲き 春をつげる
春なにゆえ 人はなれを待つ
楽しく なやましき
春の夢 甘き恋
人の心よわすそは
なれすみれ咲く春

※すみれの花 咲く頃
はじめて 君を知りぬ
君を想い 日毎夜毎
悩みし あの日の頃

すみれの花 咲く頃
今も心ふるう
忘れな君 我等の恋
すみれの花 咲く頃

花の匂い 咲き 人の心
甘く香り 小鳥の歌に
心踊り 君とともに 恋を歌う春
されど恋 そはしほむ花 春とともに 逝く

※くり返し

② 愛の讃歌

あなたの燃える手で わたしを抱きしめて
ただ二人だけで 生きていたいの
ただ命の限り わたしは愛したい
命の限りに あなたを愛するの

頬と頬よせ
燃えるくちづけを
交すよろこび
あなたと二人で
暮せるものなら
なんにもいらない
なんにもいらない
あなたと二人で
生きて行くのよ
わたしの願いは
ただそれだけよ
あなたと二人

固く抱き合い 燃える指に髪を
からませながら いとしみながら
くちづけを交すの 愛こそ燃える火よ
わたしを燃やす火 心とかす恋よ
ラララ……………
わたしを燃やす火 心とかす恋よ

③ サン・トワ・マミー

二人の恋は 終ったのね
許してさえ くないあなた
さよならと 顔も見ないで
去っていった 男の心
楽しい 夢のような あの頃を思い出せば
サン・トワ・マミー 悲しくて
目の前が暗くなる サン・トワ・マミー

サン・トワ・マミー 風のような
青空をさまよう恋
サン・トワ・マミー 淋しくて
目の前が暗くなる サン・トワ・マミー
サン・トワ・マミー
サン・トワ・マミー

④ さくら貝の歌

うらわ
美しき 桜貝一つ
去り行ける 君にささげん
この貝は 去年の浜辺に
われ一人 ひろいし貝よ

ほのぼのと うす紅染むるは
わが燃ゆる さみし血潮よ
はろばろと かよう香りは
君恋うる 胸のさざなみ

ああなれど 我が想いははかなく
うつし世の なぎさに果てぬ

⑤ 川は流れる

わくらば
病葉を きょうも浮かべて
まち
街の谷 川は流れる
ささやかな 望み破れて
かな ひとみ
哀しみに 染まる瞳に
たそがれの 水のまぶしさ

思い出の 橋のたもとに
さび
錆ついた 夢のかずかず
ある人は 心つめたく
ある人は 好きで別れて
吹き抜ける 風に泣いてる

ともしびも 薄い谷間を
一筋に 川は流れる
人の世の 塵にまみれて
なお生きる 水をみつめて
嘆くまい あすは明るく

⑦ 夜明けのうた

夜明けのうたよ 私の心の
昨日の悲しみ 流しておくれ

夜明けのうたよ 私の心に
若い力を 満たしておくれ

夜明けのうたよ 私の心の
あふれる想いを わかっておくれ

夜明けのうたよ 私の心に
大きな望みを だかせておくれ

夜明けのうたよ 私の心の
小さな幸福 守っておくれ

夜明けのうたよ 私の心に
想い出させる ふるさとの空

⑱ 若者たち
藤田敏雄・作詩／佐藤 勝・作曲／高田 弘・編曲
●ビリー・バンバン

君の行く道は 果てしなく遠い
だのに なぜ 齒をくいしばり
君は行くのか そんなにしてまで

君のあの人は 今はもういない
だのに なぜ 何を探して
君は行くのか あてもないのに

君の行く道は 希望へと続く
空に・また 陽が昇るとき
若者はまた 歩きはじめる

空に また 陽が昇るとき
若者はまた 歩きはじめる

⑲ たんぽぽ
門倉 鉄・作詩／堀越 浄・作曲
●アンサンブル・ヴェルソー

雪の下 の 故郷の夜
冷たい風と 土の中で
青い空を 夢に見ながら
野原に咲いた 花だから
※どんな花よりたんぽぽの
花をあなたに 贈りましょう
どんな花よりたんぽぽの
花をあなたに 贈りましょう

高い工場の 壁の下で
どれだけ春を 待つのでしょうか
数えた指を やさしく開き
空地に咲いた 花だから
※くり返し

ガラスの部屋の バラの花より
嵐の空を 見つめ続ける

あなたの胸の 想いのように
心に咲いた 花だから
※くり返し

⑳ 雪山讃歌
西堀栄三郎・作詩／アメリカ民謡／服部克久・編曲
●ダーク・ダックス

(山よ 山よ 山よ 山よ)
雪よ岩よ 我らが宿り
俺達や町には 住めないからに
俺達や町には 住めないからに

天幕の中でも 月見はできる
雨が降ったら ぬれればいいさ
雨が降ったら ぬれればいいさ

シールはずして パイプのけむり
輝く尾根に 春風そよぐ
輝く尾根に 春風そよぐ

荒れて狂うは 吹雪か雪崩
俺達やそんなもの 恐れはせぬぞ
俺達やそんなもの 恐れはせぬぞ

朝日にきらめく 新雪踏んで
きょうも行こうよ あの嶺越えて
きょうも行こうよ あの嶺越えて

山よさよなら ごきげんよろしゅう
また来る時にも 笑っておくれ
また来る時にも 笑っておくれ

㉑ はるかな友に
農部 俣・作詩・作曲／磯部 俣・編曲
●ボニージャックス

静かなよふけに いつもいつも
思い出すのは おまえのこと
おやすみ安らかに たどれ夢路
おやすみ楽しく 今宵もまた

明るい星の夜は 遥かな空に
思い出すのは おまえのこと
おやすみ安らかに たどれ夢路
おやすみ楽しく 今宵もまた

さびしい雪の夜は いろりのはたで
思い出すのは おまえのこと
おやすみ安らかに たどれ夢路
おやすみ楽しく 今宵もまた

第2集

CD-1 叙情歌編

① 花の街

なないろの たにをこえて
ながれていく かぜのリボン
わになって わになって
かけていったよ
はるよ はるよと かけていったよ

うつくしい うみをみたよ
あふれていた はなのまちよ
わになって わになって
おどっていたよ
はるよ はるよと おどっていたよ

すみれ色してた まどで
泣いていたよ まちのかどで
わになって わになって
春の夕暮れ
ひとりさびしく 泣いていたよ

② あざみの歌

山には山の 愁いあり
海には海の 悲しみや
ましてころの 花ぞのに
咲きしあざみの 花ならば

高嶺の百合の それよりも
秘めたる夢も ひとすじに
くれない燃ゆる その姿
あざみに深き わが想い

いとしき花よ 汝はあざみ
ころの花よ 汝はあざみ
さだめの径は 涯てなくも
かおれよせめて わが胸に

⑦ 椰子の実

名も知らぬ 遠き島より
流れ寄る 椰子の実ひとつ
故郷の 岸を離れて
汝はそも 波に幾月

旧の樹は 生いや茂れる
枝はなお 影をやなせる
われもまた 渚を枕
ひとり身の 浮寝の旅ぞ

実をとりて 胸にあつれば
新たなり 流離の憂い
海の日沈むを見れば
激り落つ 異郷の涙

思いやる 八重の潮々
いずれの日にか 国に帰らん

⑧ 芭蕉布

海の青さに 空の青
南の風に 緑葉の
芭蕉は情に 手を招く
常夏の国 我した島沖縄

首里の古城の 石だたみ
昔を偲ぶ かたほとり
実れる芭蕉 熟れていた
緑葉の下 我した島沖縄

今は昔の 首里天じゃなし
唐ヲウーつむぎ はたを織り
じょうのうささげた 芭蕉布
浅地紺地の 我した島沖縄

⑨ 青葉城恋唄

広瀬川 流れる岸辺
想い出は帰らず
早瀬 躍る光に
揺れていた 君の瞳
※季節はめぐり また夏が来て
あの日と同じ 流れの岸
瀬音ゆかしき 杜の都
あの人はもういない

七夕の 飾りは揺れて
想い出は帰らず
夜空 輝く星に
願いをこめた 君の囁き
季節はめぐり また夏が来て
あの日と同じ 七夕祭り
葉ずれさやけき 杜の都
あの人はもういない

青葉通り 薫る葉緑
想い出は帰らず
樹かげ こぼれる灯に
濡れていた 君の頬
季節はめぐり また夏が来て
あの日と同じ 通りの角
吹く風やさしき 杜の都
あの人はもういない

※くり返し

⑫ 菩提樹

泉にそいて しげる菩提樹
慕い行きては うましゆめ見つ
幹にはえりぬ ゆかしことば
うれし悲しに といしそのかげ

きょうもよぎりぬ 暗き小夜中
まやみに立ちて 眼とずれば
枝はそよぎて 語るごとし
来よ いとし友 ここに幸あり

面をかすめて 吹く風寒く
かさはとべども 捨てて急ぎぬ

はるかさかりて たたずまえば
なおもきこゆる ここに幸あり
はるかさかりて たたずまえば
なおもきこゆる ここに幸あり
ここに幸あり

⑬ 故郷を離るる歌

園の小百合なでしこ 垣根の千草
今日は汝を眺むる 終わりの日なり
思えば涙 ひざをひたす
さらばふるさと
さらばふるさと さらばふるさと
ふるさとさらば

つくし摘みし丘辺よ 社の森よ
小鮒釣りし小川よ 柳の土手よ
別るるわれを 哀れと見よ
さらばふるさと
さらばふるさと さらばふるさと
ふるさとさらば

ここに立ちてさらばと 別れを告げん
山のかげのふるさと 静かに眠れ
夕日は落ちて たそがれたり
さらばふるさと
さらばふるさと さらばふるさと
ふるさとさらば
さらばふるさと さらばふるさと
ふるさとさらば

CD-2 フォーク編

① 遠くへ行きたい

知らない街を 歩いてみたい
どこか遠くへ 行きたい
知らない海を ながめていたい
どこか遠くへ 行きたい
遠い街 遠い海
夢はるか 一人旅
愛する人と めぐり逢いたい
どこか遠くへ 行きたい

愛し合い 信じ合い
いつの日か 幸せを
愛する人と めぐり逢いたい
どこか遠くへ 行きたい

② この広い野原いっぱい

この広い野原いっぱい 咲く花を
ひとつ残らず あなたにあげる
赤いリボンの 花束にして

この広い夜空いっぱい 咲く星を
ひとつ残らず あなたにあげる
虹にかがやく ガラスにつめて

この広い海いっぱい 咲く舟を
ひとつ残らず あなたにあげる
青い帆に イニシャルつけて

この広い世界中の なにもかも
ひとつ残らず あなたにあげる
だからわたしに 手紙を書いて
手紙を書いて

④ 白いブランコ

君はおぼえているかしら
あの白いブランコ
風に吹かれて二人でゆれた
あの白いブランコ
日暮はいつも淋しいと
小さな肩をふるわせた
君にくちづけた時に
優しくゆれた
白い白いブランコ

僕の心に今もゆれる
あの白いブランコ
幼い恋を見つめてくれた
あの白いブランコ

※まだこわれずにあるのなら
君のおもかげ抱きしめて
ひとりでゆれてみようかしら
遠いあの日の
白い白いブランコ
※くり返し

⑤ 竹田の子守唄

守りもいやがる
盆からさきにや
雪もちらつくし 子も泣くし

盆が来たとして 何うれしかろ
かたびらはなし 帯はなし

この子よう泣く
守りをばいじる
守りも一日 やせるやら

はよも行きたや
この在所こえて
向こうに見えるは 親の家

向こうに見えるは 親の家

⑥ 若者たち

君の行く道は 果てしなく遠い
だのになぜ 齒をくいしばり
君は行くのか そんなにしてまで

君のあの人は 今はもういない
だのになぜ なにを探して
君は行くのか あてもないのに

君の行く道は 希望へと続く
空にまた 陽がのぼるとき
若者はまた 歩きはじめる
空にまた 陽がのぼるとき
若者はまた 歩きはじめる

⑦ 誰もいない海

今はもう秋 誰もいない海
知らん顔して 人がゆきすぎても
私は忘れない 海に約束したから
つらくても つらくても 死にはしないと

今はもう秋 誰もいない海
たったひとつの夢が やぶれても
私は忘れない 砂に約束したから
淋しくても 淋しくても 死にはしないと

今はもう秋 誰もいない海
いとしい面影 帰らなくても
私は忘れない 空に約束したから
ひとりでも ひとりでも 死にはしないと

⑫ 死んだ男の残したものは

死んだ男の残したものは
ひとりの妻とひとりの子ども
他には何も残さなかった
墓石ひとつ残さなかった

死んだ女の残したものは
しおれた花とひとりの子ども
他には何も残さなかった
着もの一枚残さなかった

死んだ子どもの残したものは
ねじれた脚と乾いた涙
他には何も残さなかった
思い出ひとつ残さなかった

死んだ兵士の残したものは
こわれた銃とゆがんだ地球
他には何も残せなかった
平和ひとつ残せなかった

死んだかれらの残したものは
生きてるわたし生きてるあなた
他には誰も残っていない
他には誰も残っていない

死んだ歴史の残したものは
輝く今日とまた来る明日
他には何も残っていない
他には何も残っていない